

# キャリアデザインの時代(その四) : キャリア研究の舞台であるアングロサクソン社会と彼らの描く未来

小門, 裕幸 / KOKADO, Hiroyuki

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

18

(発行年 / Year)

2011-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007599>

〈研究ノート〉

## キャリアデザインの時代（その四）

### ーキャリア研究の舞台であるアングロサクソン社会と 彼らの描く未来ー

法政大学キャリアデザイン学部教授 小門 裕幸

#### はじめに

- 1、アングロサクソンとアメリカ
- 2、アメリカという国のかたち
- 3、アメリカは資本主義の優等生か劣等生か
- 4、アメリカが目指す社会

#### はじめに

江戸の明るくておおらかな文化に比べるとヨーロッパ文明には暗いイメージがつきまとう。原罪を背負い戦乱が絶えず魔女狩りが起こる。長くて暗い冬ゆえにクリスマスが冬至に設定されたという説も信じたくなる。だからこそ中欧で宗教革命が起こり啓蒙主義が誕生し、そしてイギリスで産業革命の火ぶたが切られたのではないかと考えることがある。彼らは、暗黒の中世という封建時代を打ち破り人間を縛っていたキリスト旧教の桎梏に闘いを挑み、近代という時代を生み出した。厳しい気候、陰湿な環境に堪えた彼らの鬱積したエネルギーこそが自立した強い近代の個を誕生させたのではないか。17、18世紀彼らは自由・平等という自然権という概念、民主主義という政治原則、法の支配という秩序原則を創造する。それらが彼らの精神構造の中に埋め込まれているように見える。しかし、この欧州の近代思想である自由・平等・民主主義の理想はアメリカというしがらみのない新世界で花開くことになる。

最後にその主役を演じることになったのがアングロサクソンと呼ばれる人たちである。彼らは19世紀七つの海を制し世界の覇権を握ったイギリス人であり、そして彼らのビジネスマインドやビジネス文化を受け継いで新大陸に理想郷を築こうとしたアメリカ人である<sup>1</sup>。アメリカは人種の坩堝あるいは人種のサラダボールといわれる多民族国家である。しかしその文化伝統はイギリス、アングロサクソン社会のものを継承した。アングロサクソンの言葉（公用語としての英語）、法の考え方やビジネスの手法などがアメリカの地に根づくことになる。その後アメリカはあまたの発明発見により産業資本主義を発展させ20世紀の覇者となる。そしてそのアメリカでキャリアという概念が誕生する。

約20年ぶりに刊行されたキャリア研究ハンドブック<sup>2</sup>を一昨年一読した。キャリアという概念が幅広く日常的に使われるようになり、キャリアという言葉は従来の経営学や心理学の一部の学問分野にとどまらず、かなり広範に使われるようになったとしている。

「キャリアとは、人と人に公式なポジションを与えるもの（組織や機関）との関係性が反映されたものである。さらにその関係性も時間の経過とともに変わる。その変化の仕方がまたキャリアに反映することになる。従ってキャリア研究とは、個人と組織の変化の研究であると同時に社会の変化（societal change）をもカバーすべきものとなる（Van Maanen）<sup>3</sup>」

このことは、キャリア研究が極めて広範な、彼らの言葉を借りると、Perspective on social inquiry (社会的な問いかけに対するものの見方) 以外の何物でもないということになる。しかし、いずれにせよ人生 (passage of time) という時間の流れが、人にどのように影響し、いかなる効果をもつかということが中心的テーマ (concept) であろう。そしてその研究は、一つは、過去から現在へ向かった、つまり過去を振り返りつつ過去から現代を観る。経歴から生き方をトレースする。或いは特定のグループを取り上げてその構成員の総体的な経歴を調べ総合化する。そのような retrospective なものである。

そしてもう一つは、職業選択に関する調査のようなもので、例えば若者についていえば、彼の適性がどのように彼の将来に影響するのか、或いは彼がロールモデルを見つけた場合それが彼にどのような影響をあたえるのか、その結果として成功するのかしないのかを予測する。前述の retrospective とは逆の現在から将来に向かう、prospective なものである。

さらにもう一つ、AT&Tの管理職に対して実施したような長期・大規模な研究も必要であろう (longitudinal) <sup>4</sup>。

20年ぶりに発刊された今次ハンドブックが問題にしているのは、キャリア研究という分野が70年代に比べると重大な路線変更を求められているということである。つまり、90年代に入ってから女性の社会進出とICT革命が我々の生活様式を変貌させ、キャリアと呼ばれる概念が途方もなく拡大した。キャリアが決定される力学<sup>5</sup>も変化した。長寿化が人生中期 (mid-career)・後期 (late-career) のキャリアや退職後のキャリアまでを研究対象として浮上させている。経済社会の変貌は新しい生き方を誕生させている。今回のハンドブックのあとがきにエドガー・シャインがいみじくも述べているようにキャリアはより一層の学際的研究が行われなければいけないのであろう。さもなくば本質が見えてこないように思われる。

私たちがフォローしているキャリア研究は、ハ

ンドブックの編者 Gunz が指摘しているように、1970年代のMITやハーバードを中心とするボストン周辺および東海岸の学者・研究者に集中的に依拠している。それはアングロサクソンを中心とする研究者による大企業に就職したアングロサクソンのエリート層に限定された研究ではなかったか。就業文化や個の意識が異なる日本で彼らのキャリア理論がそのまま適用可能なかどうかという疑念が湧く。同ハンドブックでも Peter Cappelliが日本とアメリカではステレオタイプが異なると明確に指摘している<sup>6</sup>。また同ハンドブックのcareers across culturesの章で文化が異なればキャリア理論も異なるのではとのコメントも載せられている。

今次ハンドブックの執筆者の多くがアングロサクソン諸国で学び教鞭をとっているものが多いのも気にかかる。ハンドブック執筆者は合計53人いるが3人のオーストリア出身と1名のオランダ人を除いてはすべてアングロ文化圏の学者・研究者である。インド・中国 (香港) 出身とおぼしき学者・研究者がいるがすべてアングロ圏で教育を受けているものである。

本稿では、キャリア理論をリードするアングロサクソン主導の社会について、そこで数年を過ごした私の経験を踏まえつつ、ささやかながら頭の整理をしてみたい。キャリア研究の先達であるアングロサクソンを中心とする学者がアングロサクソン主導社会を彼らの研究対象とした。その社会を彼らの歩んだ道 (歴史) を辿りつつ、まとめてみたい。我々のキャリア研究はそのことを捨象することはできないように思えるからである。

## 1、アングロサクソンとアメリカ

### 1) WASP とピューリタニズム

アングロサクソンとはドイツ人と同じゲルマン民族の一派で、英国に渡ったアングル人とサクソン人の総称である。アングロは「イングランド」の語源ともなった。アメリカではWASPという言葉

葉がよく使われる。白人 (White)、アングロ (Anglo)、サクソン (Saxon)、プロテスタント (Protestant) の頭文字を取ったものである。

アメリカは欧州に比べるとキリスト教が生き延びている国である。国の礎を作ったのはキリスト教の中のプロテスタントである。とりわけピューリタンと呼ばれる人たちの伝統がアメリカという国の底流にあり脈々と受け継がれている。

ピューリタン (Puritan) とは、カルヴァンの影響を受けたイギリス国教会の改革を唱えたキリスト教プロテスタントの一派のことをさす。日本語では清教徒と訳される。クロムウェル率いる清教徒革命を起こしたことでも有名である。

1620 年、そのピューリタンの一部の人が祖国での弾圧を逃れ、メイフラワー号に乗りアメリカに移住する。彼らはニューイングランド地方 (現マサチューセッツ州のプリマス) への上陸に先立ち船上で契約を取り交わす。これがメイフラワー盟約とよばれるものである。そこから読み取れる社会契約思想はアメリカの独立や憲法制度に大きな影響を与えた。彼らは、自由意志と自己責任に目覚めた個人主義の集団である。加えて、ピューリタリズムを信じる道徳心が篤く独立心がひとときわ高い人たちである。そしてそれだけに法や国家からの介入や自由への侵害に対しては断固たる態度をとる。彼らは神に直接語りかけ神に対して契りを交わす。個としての正義感や責任感がひととき強い。集団の掟には縛られない強い個をもっている。個人を裁くのは決して組織でなく法である。法の支配による秩序社会を創ろうとしたのである。

## 2) 集権と分権 そして憲法

彼らはしがらみのない新世界という白地図に多様な地域コミュニティの絵を画いてゆく。彼らはゼロから自力でコミュニティをつくり上げた。彼らのアイデンティティは明確で、彼らの誇りは尋常では語れない。このような歴史の積み重ねが独立戦争を経て連邦国家を誕生させた。イギリスか

らの独立のエネルギーが自律性の高かった地域コミュニティを束ねることになる。しかしながら地域主権は残った。アメリカは地方を優先する地域主義社会といえなくもない。50 州すべての州にも憲法があり商法も民法も異なる。イギリスからの独立時、集権と分権の妥協点を見出さざるをえなかった。連邦国家<sup>7</sup>という発明品が生み出される。

このような産みの苦しみから誕生したアメリカ憲法の大きな特徴は、世代が変わればその世代に合ったように修正できることである。憲法のかまえを柔軟にすることで世代間の妥協を行ったといっても良い。自由と平等と民主主義を限りなく理想に近づけたいと願う建国者の思いが憲法をこのように設計したのではないか。アメリカ憲法は時代の変遷とともに幾たびとなく修正 (amendment) が行われ今日に至っている。

メイフラワー号のピューリタンたちは無事上陸したが厳しい冬を越えることは困難であった。多くの人が命を失うことになる。彼らの新世界での生活は壮絶なものであったようだ。苦難を乗り越える中で培われたチャレンジ精神や不屈の魂、そしてお互いを助け合うというコミュニティ重視の思想は伝統として定着する。

アメリカ人は今なお small town が好きだ。その言葉は古き良き時代のコミュニティへのノスタルジを掻き立てるようだ。彼らに埋め込まれた DNA が呼び起こされるのであろう。

## 3) 普遍主義・分解主義・個人主義・自己基準・連続的時間観

1993 年、オランダの国際ビジネス経営センターの研究者、オランダ人ハムデンターナとイギリス人トロンペナルスは<sup>8</sup>先進国を対象に 1 万 5 千人の企業管理職に対しアンケート調査を実施した。富を創造する価値観について地域別・国別に (経営) 文化人類学的な視点で分類を試みた。アングロサクソンについて興味深い結果を提示しているので、そのいくつかを紹介したい。

第一は、アングロサクソンは個別主義ではなく

普遍主義であるという点だ。彼らは普遍的に規則を適用しようし、例外を発見する都度修正していくという性向が顕著である。

彼らはジャスティス（公正・正義）とかフェア（公平）という言葉をよく使う。また、具体的な表現として平らな競技場（level playing field）という言葉にもよく遭遇する。平らな競技場とはラグビーやサッカーで使われる言葉である。一方のチームに有利にならないように競技場に傾きがあってはならない。つまり平ら（level）でなければいけないということだ。二国間金融協議の場で堂々と level playing の原則を執拗に主張されたことが私の記憶に強く焼き付いている。

市場原理も透明性と公平性という普遍的なルールを前提として成立している。透明で公平な条件のもとに競争原理が機能する。

彼らはこの公平という普遍的ルールに違反するものは許さない。日米協議での彼らの強硬な姿勢の根底にはこの考えがある。

彼らは、市場は自律し独立した個人ののための合理的な出会いの場を提供していると考え。そこには相手との個別の感情や相手の出自などは捨象され、しかも市場参加者は匿名の個人や法人として存在するのみである。そのような市場に不正な事件が起こり既存のルールでは対応できないと判断した時、あるいは時代の変化の中で不都合が生じた場合には、彼らは一般的なルールを新たに作り出そうとする。アングロサクソンが多くのスポーツを生み出すのは、普遍的なルールを作りそれに従って行動することに合理的性があることを良く理解しているからであろう。

普遍主義の対極にあるのは個別主義である。個別主義は我々アジア人の特徴である。とりわけ世間や会社のルールが重たい日本はその典型かもしれない。普遍ルールである法が世間体抑圧され会社の掟が法を優先してしまう。一般の紛争もアングロサクソンのように法廷で解決されるのではなく、個別のメリットにより動機づけられる。示談で行われることが圧倒的に多いのはそのためではないか。アメリカで日本法人がセクハラ事案の

狙い撃ちにあったことがある。日本法人に女性をもぐりこませセクハラで難癖をつければ簡単に示談に応じる。裁判にかければ日本法人側が絶対に負けることはないものでも争おうとはしない。表ざたにしたくないのである。このようなことがアメリカで頻発した。

日本は「法の支配」による国ではない。権力を得たものが支配の手段として法を使っているように映る。世間的に疎ましくなった人を正面突破ではなくて通常適用されないような法律の条項を持ち出して別件逮捕を行ったりする。交通違反事案で異議申立は難しい。権力側の判断を一方向的に押しつけられる。交通違反に関して毎日のように裁判官の前に行列ができるアメリカとは大違いである。被告人からの証拠提示が行われれば違反は簡単に取り消される。検挙した警察官は忙しいので立ち会わない。裁判官に一任されている。極めて人間本位、かつ合理的である。ルールという普遍性が優先される社会である。

第二点目は分析的合理主義と全体的調和主義である。アングロサクソンは分析的合理性を追求する。要素還元的議論や分析が得意である。作業の形式知化、部品のモジュール化・人材のコモデティー化・金融の証券化・会社の LBO などの手法もこの思想につながる。そして、その分解された要素についてマニュアル化やシステム化を推進しようとする傾向が極めて強い。普遍化が性癖になっている。彼らが優れているのはこの要素分解的な性向が欠点であると気が付いていて、全体調和による修正にも留意していることである。行き過ぎた専門性に対してリベラルエデュケーションの重要性を指摘する。ホリスティックな起業学のアプローチが声高に叫ばれる。それらはその表れである。

三つ目は 個人主義的か共同社会的かという論点である。アングロサクソンはどちらかといえば、他人を必要とせず、他人の意見に左右されず、他人の要求に従わず孤高としている。カッコよく言えば、集団に迎合しないが集団を守らなければいけないときは彼自身の判断で守る。集団の

価値観に奉仕すべきと判断した時は行動に移す。その判断を曇らさないために敢えて孤独でいるのかもしれない。日本人が考える利己主義的個人主義では決してない。組織についても、自己実現や自己表現を抑圧するものに対しては拒否する傾向が強い。アメリカには起業家やスモールプレーヤが多いが、彼らのそのような個人主義が起業家精神をつくり上げている。

共同体主義は、欧州でもドイツやイタリアにおいてその傾向がある。戦前、ナチズムに国を挙げて傾倒していったドイツ。戦後もドイツでは労使の共同決定方式による会社経営が法制化される。イタリアではゴッドファーザーをピラミッドの頂点に据えた家族共同体の結束が固い。権限はその集団の長に集中している。

日本を想起すると良く理解できるが、共同体主義の人たちにとっての外とはその共同体の外のことである。内とは共同体の中である。集団としての排他性が極めて強い。アングロサクソンの内と外との境界は共同体ではなく個にある。個の中(内)への立ち入りは極めて難しい。しかし、共同体は外に開いており多くの人を受け入れる。

#### 4) 核家族・長子相続の伝統と自由主義

フランスの人口学者エマニュエル・トッド(1951～)<sup>9</sup>は、家族制度と遺産相続時の親の財産分与の違いから、近代の欧州を4つに大別した。家族制度について絶対核家族(自由主義的)か直系大家族(権威主義的)かに分け、そして遺産相続に関して長子相続を典型とする不平等分配かそうではない平等分配かに分ける。その組み合わせとして次の四つに分類した。A 絶対核家族・長子相続(不平等分配)、B 絶対核家族で平等分配、C 直系大家族で長子相続(不平等分配)、D 直系大家族(共同体家族)で平等分配の四つである。

キリスト教という支柱を失った欧州の人々は新しい理想郷を描くにあたり、それぞれの特徴あるイデオロギーを求め、それぞれ特徴ある地域社会

を打ち立てた。トッドは、そのときこの伝統文化が大きく影響したと主張する。

イギリス(アングロサクソン)地域はAの絶対核家族・長子相続(不平等分配)に属する。平等が絶対ではなく自由への欲求が強い。共同体指向は低調で自律した個人が独立して、自由を重んじ市場主義的な行動をとる。そのような特徴があると説明している。

因みに、フランスはBで自由主義にして平等主義的なイデオロギーに傾斜し、ドイツは直系大家族に属し不平等分配のCである。権威主義にして不平等主義的なイデオロギーとなったとする。ロシアの多くは共同体家族地域で平等分配のDである。ロシアが権威主義的にして平等主義的なイデオロギーとなりやすかったとするのである。20世紀のそれぞれの国が辿った歴史をふりかえると、各国の特徴と確かに一致している。

我が国は大家族で長子相続。ドイツと近似する。わが国が維新時ドイツに習って国に形を整えた。その後アメリカの影響下アングロ化する。自由・平等の思想をその真意を理解せず推し進めようとした。一方、今別の要因で大家族制は崩壊している。新しい国の形を模索するには、日本はこれまで培ってきた伝統と急速に変化する現下の状況を踏まえてこの事態に対応する必要があるように思える。グローバリゼーションが進む中、ガラパゴス化を自称し、一方でナショナリズムが高揚しつつある点も気にかかる。

#### 5) コモンローという歴史の所産

アングロサクソンの法は大陸諸国の法とは根本的に相違する。日本はドイツ法を取り入れており、アングロサクソンの法体系および考え方とは異なる。したがって、日本人にとってはアングロサクソンの考え方は、なじみにくいものとなっていることも否めない。

封建制度が崩壊し近代化が要請されたときに、アングロサクソンの国イギリスでは、早くから中央集権的であったので法の運用に関して、一体的

な扱いがなされていた。その彼らが歴史の積み重ねの中で編み出していた法の総体をコモンロー（あるいは慣習法、判例法）と呼ぶ。他方、大陸諸国では、集権化時代、地域ごとに異なっていた法をローマ法大全により統一する。それは欧州がギリシア・ローマ以来の歴史を通じて営々と築きあげ延々と継承してきた知識体系である。歴史の違いが同じ欧州でもコモンローと大陸法と呼ばれる異なる法体系を生み出した<sup>10</sup>。コモンローはイギリスやアメリカの法体系であることから英米法とも呼ばれる。

コモンローでは、次のような考え方がとられる。まず、事実関係を詳細に分析する。それが判例およびその他の従来法の前提としている事実関係において重要な点で相違があるのか（意味の差があるのか）を検討する。違いがあるとすれば法的効果も異なるのか、違いがあるにも拘らず同様の結果で良いのか、について、その都度検討が加えられ判断が下される。このようなケースバイケースの実践の積み重ねが繰り返される。法的効果を変更するなど新しい判断がなされると新しい判例ができる。その都度その都度の判断が重要な法体系の一部を構成することになる。言い換えると、法律問題に直面した時の立論の基礎が「まず従来の判例にもとめ、それを類推し拡張し反対解釈し」というやり方で解決しようとする帰納的傾向が強い（判例主義）のである<sup>11</sup>。

これに対し、大陸法は整った論理体系を受け入れたことから、一般原理からの演繹の形でものを考える傾向が強い。比喩的に表現すれば、英米では論理が水平に展開されるのに対し、大陸では論理が垂直に展開される<sup>12</sup>。

また、アングロサクソン諸国が適用する英米法では、このようなケースバイケースのアプローチがとられるため、ものごとをプラクティカルに見ることになる。このことは問題が生じたときに救済の可能性を探るという態度で臨むことを意味する<sup>13</sup>。また、アングロサクソンが法や権利という言葉を使うときは、それは裁判所でエンフォースされる（効力をもたせる）ものと考えている<sup>14</sup>。つ

まり、官僚が事前に決めるのではなく、事後的に裁判により決定するのである。裁判所で行われるということは多くの弁護士を必要とすることになる。日本では権利は与えられたもので権利の侵害があればお上が守ってくれるという意識が強いが、アングロサクソンは権利とはそれぞれの人間が主張し実現すべきものと観念している。自力救済が原則として認められ、正当防衛が日本より広い範囲で認められるのである。

これは文化的背景として顕著な相違点である。人間の心の持ち様や行動様式にも大きな影響を与えていると言わざるをえない。自分をしっかり持ち自己主張しないといけな。アングロサクソン社会では個の自律は必然であるような気がする。

## 6) エクイティ・カルチャ、エクイティ・マインド

エクイティとは公平という意味である。金融用語では自己資本のことを指す。その淵源はエクイティ法にさかのぼる。ここでは金融に絞ってアングロサクソンのエクイティ・マインド、エクイティ・カルチャーについて触れる。

金融用語では借入による資金調達のことをデット (debt)・ファイナンスといい、株式で資金を調達することをエクイティ (equity)・ファイナンスという。アングロサクソンは冒険心に富んでいてリスクを取って収益を上げることに長けているようである。リスクをとるという感性を金融の土俵に置き換えるとエクイティ・カルチャーということかもしれない。東インド会社への投資、マーチャントバンクの活躍、アメリカに上陸してインベストメントバンクが興隆する。バンク（銀行）と名前が付いているがエクイティを扱うことが多く、日本では証券会社と呼んだ方が正確である。彼らはエクイティをベースに据えてビジネスを展開する。レバレッジという言葉がある。梃子という意味である。彼らが金融でレバレッジという言葉を使うときは、エクイティにデットを混ぜることにより梃子を聞かせて収益率を上げることを意

味する。本来はエクイティのみでは大規模な案件は扱えないが、デットを足し算することで投資収益率は梃子を効かせるごとく上げることができる。彼らはあくまでもエクイティをベースに物事を考えているからこそレバレッジという発想になる。レバレッジは金融の基本が貸借と考えている日本人には理解できない概念である。

リスクマネーがあり有限責任の株式会社という仕組みが発明される。有限責任という世界であるから委任行為やagentという法的概念、そしてアカウントビリティやガバナンスという考え方がでてくる。日本人はこれらの言葉は学ぶが日本文化の中ではなかなか実感できないものである。

株式会社が株主のものであり、TOBをかけM & Aをおこなう。アングロサクソンは会社を貨幣のように扱う。これら一連の概念はリスクに関して経済合理性を追求して生み出されたと考えたと理解しやすい。

日本の会社は海外に子会社を設立するときでさえ、日本で借入を起こしてそれをエクイティマネーに安易に変えてはいないか。アングロサクソンはエクイティマネーの扱いに長けたビジネスマンである。エクイティ・カルチャー、エクイティ・マインドが人口に膾炙している。起業する発想もここから発すると考えると分かりやすい。

## 2、アメリカという理想郷への道 (欧州近代の苦悩)

### 1) 近代の創造

欧州は、宗教改革・啓蒙主義と呼ばれる精神革命と経済的には産業革命という大変革を起こし、歴史に大断絶をもたらした。それは人類史の奇跡であるともいわれる。

個は中間介在者を失い、誰かの庇護のもとにおかれることもなく、ひたすら神との一対一の直接的関係性の世界で生きていくことになった。個は、限りなく強くならざるを得ず、自立・自律する。欧米人は、人におもねず、人に依存すること

なく、人に迎合することなく、自分で判断する個人主義を打ち立てたように私には映る。

ジェレミー・リフキンは次のように説明している。

理性を信奉する西欧文明 (啓蒙主義) は、中世 (教会と領主) という「くびきの時代」から人々を解放し、資本主義の基盤ともいうべき私有財産制度を確立する。信仰ではなく理性を信じようとしたプロテスタンティズムと啓蒙主義の嵐 (宗教改革) は、教会から所有地を没収し封建領主からも土地を奪い取った。……このとき、個人は「存在の大きい鎖につながれた忠実な従僕」から「各自が天職を持ち、より大きな神の栄光のために自分の物質的境遇の改善を怠らぬ自律的行為者」へと一大変身をとげる。財産も領主制上の権利から排他的所有権に変貌する。……経済システムは顔見知り同士の素朴な財の交換から市場を介する不特定多数を対象とする大規模な経済圏を求めるようになる。国家が私有財産を守る機関として登場しなければいけなくなったのである。……私有財産は個人が自由を手に入れるための一種のチケットとなった。自由とは自分で行動し自らリスクを背負うこと (自律性) であり、そのかわり個人の機動性が増大する。他人に依存したり世話になったりはしない。財産が増えるほど自律性と機動性がたかまる。それは彼らにさらなる自由を約束した<sup>15</sup>。

強くなった個には理性が共通して存在し、その限りにおいて人間は平等で個人の意思を最大限重視し民主的に束ねることで秩序が生みだされると信じた。その結果個人の成長が社会の成長に導くという近代合理主義に基づく社会観をつくりあげたのである。

イギリスのアングロサクソンに発した産業革命はプロテスタンティズムの思想も手伝って私有財産制度の確立と利潤の正当化、市場システムの整備と拡大をもたらし、資本主義を産業資本主義に大きく飛躍させることになる。これらの大事件を



経験した欧州は歴史のスピードを早め、宗教に代って種々のイデオロギーを生み出し新しい国家形態を誕生させることになる。理想郷アメリカの淵源はここにある。

## 2) 真の理想郷を求めた人々の脱出と三つの国家形態の誕生

私有財産制にいち早く柔軟に適応した貴族・ブルジョワ階級は、共和政治の理想郷づくりに成功した。イギリスでは清教徒革命につづいた名誉革命で絶対王政を打ち破り国会を主体とする立憲君主制と呼ばれる共和的政治体制を築く。「国王は君臨すれども統治せず (The King reigns, but does not govern)」の原則を打ち立てるのである。

このとき旧来の伝統的共同体から脱却できなかった人々にとっては暗黒郷にとどまらざるを得なかった。彼らにとってそこからの唯一解放される方法として新天地への冒険の旅立ちがあった。彼らは自由と民主主義を掲げて宗教的迫害と貧しさから新大陸に向かう。さながら現代のボートピープルである。当時の欧州の辺境の地であるアメリカに彼らにとっての理想郷を建設することになった。そして彼らは百有余年をへて、自由主義経済国家を生み出すのである。

その後の欧州では自由主義・民主主義が必ずしも定着しない。産業資本主義が進展する中でマルクス・レーニン主義を信奉するプロレタリアットと呼ばれる人たちは、1917年革命という過激な手段で社会主義国家を誕生させる。私有財産制度を否定し平等に価値をおく理想郷を夢見たのである<sup>16</sup>。

また1930年代入ると、自由より平等という価値に重きをおく全体主義という政治形態も現れる。ドイツのナチスを典型として弱い孤独な個が共同体に安易に助けを求めたのである。

いずれにせよ、欧州近代の歴史は、国家の形態でいうと、資本主義国家 (私有財産制、自由、市場経済)、社会主義国家 (共有、平等、計画経済)、全体主義国家 (個人の平等を標榜しつつ実は自由を拘束し国家の利益を優先する専制国家) の三つを誕生させた。

## 3) 大戦後のアングロサクソン社会

第二次大戦後の欧州は大きな政府による社会主義国家の途を歩むことになる。大戦争で疲弊した経済復興するためにほとんどの国が自由主義を標榜しながらも平等に重点を置く福祉国家を望んだのである。

太陽が沈むことがないとまでいわれた、アングロサクソンの国、大英帝国も同様であった。衰亡する経済に歯止めがかからない。戦後まず彼らをとった途は、他の欧州諸国と同じ社会民主主義 (第一の道) であった。すべての人にある程度の平等な生活を保障することを理想として、そのためには政府が一定の役割を担おうとしたのである。企業の国有化がおこなわれ大きな政府が誕生する。経済の衰退は止まらない。負債が累増し経済は火の車となりイギリス通貨ポンドは再三の切り下げを迫られる。

1970年代の終わりに彼らが選択したのは、新自由主義 (第二の道) であった。それは小さい政府で自由化を推進するものであった。鉄の宰相サッチャーが陣頭指揮をとった。イギリスは国際金融センタ、シティを擁する自由経済圏の主要国として復活することになる。

1990年代経済は落ち着きを見せるが、他方社会の不満がたまる。仮借ない競争的社会に対する反動である。労働党の若きリーダー、ブレアが登場することになる。彼は社会民主主義 (第一の道) でもなく新自由主義による経済政策 (第二の道) でもない、第三の道 (*The Third Way*) と呼ばれる経済政策を提示した<sup>17</sup>。それは市場の効率と社会正義や平等とを両立せんとする壮大な構想であった。それは労働党のブレンとなった社会学者アンソニー・ギデンズが提唱したもので、社会政策的には、新自由主義<sup>18</sup>に対して、ニューレーバー思想<sup>19</sup>と呼ばれるものであった。この考え方は、公共空間たるコミュニティにスポットライトをあて、市場と国家を対立軸で捉えるのではなく補完的なものとして位置づけるものであった。市場と国家の中間体としてのコミュニティと公共部門とのパートナーシップを訴えた。そこでは、自発的

市民の参加型社会を希求し、「排除しないこと (inclusivity)」による市民社会の再生をスローガンにした。

なお、アメリカでもサッチャーとブレアとほぼ同時期に同様の政治経済路線がとられた<sup>20</sup>。

### 3、アメリカは資本主義の優等生か劣等生か。

#### 1) 資本主義とは

資本主義という言葉の定義は一説には100以上あると言われる。一般的には①私有財産制②経済目的としての利潤と効用の最大化③市場の存在と価格システムにまとめられる<sup>21</sup>。なおマルクスは労働力の商品化に焦点を当て、資本蓄積を大きな特徴としてあげる。

アメリカの高校生向けの教科書には、資本主義は「一般市民が生産要素を所有し市場における競争により安くてよいものを買う意志があり能力のある人に分配される経済システム」と紹介され、「経済的自由・自発的交換・私有財産・利潤動機を特徴とする自由企業制度がこれを支えている」と記されている。そこでは①点火装置としての起業家の役割と②市場の主権者としての消費者の役割、③そして市場経済インフラの維持提供者(所有権の保護、契約社会のアンパイヤ、新しいルールの民主的手続きによる成文化)であり公共財(外交・安全保障など)の提供者でもある政府の役割が述べられている。

資本主義はあまりにも多様化し複雑化している。ここでは経済学者レブケの定義ならって、資本主義とは経済システムの問題ではなく事実上の結果としての発展形態あるいは歴史的なユニークな配合体であるとしておきたい<sup>22</sup>。資本主義は経済的・社会的・法的・政治的・道徳的、はたまた文化的な諸要因が全体として結びあわされたものである。個々の人々にとっては、資本主義はその時の歴史的な従って一回きりの配合でしかない。決して市場経済の秩序原則そのものをあらわすも

のではない。資本主義というのは経済秩序のひとつの型を言い表すのではなくて単に特定の経済史社会史上の一時代をその個性やその一回きりの存在をその複雑な様相において言い表すに過ぎないと考えておきたい<sup>23</sup>。

我々はこの複雑な様相を呈している資本主義という世界に住んでいる。それは、不完全なものであり、我々参加者がしっかりしていないと暴れ出す。しかし、第二次大戦を勝利に導いたチャーチル (Winston Spencer-Churchill) が「資本主義は最悪の選択肢である、しかし他のシステムよりは遥かにましである」と指摘したように、今のところ資本主義以外の選択肢はないことも否定しがたい事実である。

資本主義も民主主義も対等な人間関係を維持し権力の肥大化や偏在化が起きないように社会をつくるためのセカンド・ベストの選択である。決してベストの社会の仕組であるとは考えていない。それは欧米人、とりわけアングロサクソンの人々の良識である<sup>24</sup>。従って、アングロサクソンの人々はシステム不良に対しては決然と浄化し迅速に改良を重ねてきている。

レブケがいうように歴史の生み出した資本主義はこの改良しようとするモメンタムとなお市場経済の秩序原則を肯定しようとするモメンタムの二つの焦点を持つ楕円をときに応じ変形させながら進化させざるをえないのであろう<sup>25</sup>。

#### 2) 資本主義の精神

ドイツの高名なる社会学者マックス・ウェーバーは近代資本主義の起源を宗教改革に見つけた。経済社会における個人の行動は社会への積極的役割の完遂にあった。それはとりもなおさず天職 (Calling, Beruf) を全うすることである。現生において勤勉に働くことにより、あるいはまた人間に与えられた才能を活かすことによって、自分の運命を切り開くことができる。そのような教えがそれを支えていた。天職を媒介させたプロテスタントの勤勉さという倫理が資本主義の営利追

求という精神に結びつく。プロテスタントの倫理・精神はハードワーク、勤勉、節約、自己規律などを意味する。それがアングロサクソン資本主義の基盤をなすものであった。そして妬みや嫉妬、徒党を組むことなど、さががたいの人間の本性に正面から立ち向い極力回避しようという倫理性はアダム・スミス以来のアングロサクソンの伝統である。

もちろん資本主義の諸制度は契約法や利子概念を含めてローマ時代にさかのぼる。また、譲渡可能手形、船荷証券、破産法（債権の保全）、合資会社制度、商業登録や特許権などの制度は、12世紀から13世紀にかけてイタリアのトスカナ地方を中心として生まれたと言われている。その当時すでに、複式簿記の完成、海上保険や海図、羅針盤の普及といった技術革新も起きている<sup>26</sup>。要すればカトリックの反ビジネス倫理が天職という概念を通じてプロテスタントの親ビジネスの倫理や精神に直結し、資本主義が発展したというのがマックス・ウェーバーの所説である。

### 3) 多様な資本主義とアメリカ

#### i) 多様な資本主義

1989年、東西世界分断の象徴であったベルリンの壁が崩れ、瞬く間にソビエトそして東欧諸国などの社会主義国が瓦解し資本主義に移行する<sup>27</sup>。1990年代は資本主義が独り勝ちの様相を呈した。しかし、逆にそれはむしろ世界に多様な資本主義国があることを強く意識させることになる。とりわけ、アングロサクソン型資本主義と欧州大陸を中心とするライン型資本主義の差異を強烈に認識させられることになった。

1991年、欧州の都市銀行の理事やEC（現EU）の局長などを歴任したフランスの経済人ミッシェル・アルベールが「資本主義対資本主義」を著し、ネオアメリカ型資本主義とライン型資本主義とに大別した。ネオアメリカ型は英米を中心とするアングロサクソン資本主義であり、ライン型とはドイツを典型とする経済である。アルベール

は、母国フランスはライン型に近似し、よりドイツ型に染めあげるべしと説いた。彼の認識するアングロサクソン資本主義の特徴は個人の成功と短期利益、証券市場を中心とする直接金融制度等であり、ライン型の特徴としては、集団での成功、コンセンサス、長期的配慮、銀行を中心とする間接金融などである。そして、彼は、日本はライン型に近いと指摘している。

なお、2007年、アメリカの経済学者W.J. ボーモルたち<sup>28</sup>は、国家経済の牽引力としての起業やアントレプレナーが注目される中で、アメリカにもその傾向があることを認めつつ、小規模の革新的企業が活躍するイスラエル、台湾、アイルランドなどの国々の資本主義を起業的資本主義と呼び始めている<sup>29</sup>。

#### ii) アメリカ資本主義の進化とスーパーキャピタリズム

アメリカは自由で民主的な理想郷としての国づくりを目指して出発する。第二次世界大戦後は圧倒的な経済力を背景に、ドルを基軸通貨とする世界の通貨制度をIMFによる流動性供給確保により確立する。また世界銀行（IBRD）の設立により途上国への資金供給システムもつくりあげる。近代経済学を唱え自由貿易をGATTにより推進する。資本主義の盟主としてバックアスアメリカナの時代をつくりあげた。

戦後のアメリカ資本主義は、巨大寡占企業と巨大労働組合、そして政府のルールに従う公共企業の組み合わせにより、いわば経済と政府が機能的に融合し、人類史上未曾有の繁栄を享受する。規模の経済により生産性が高まり雇用は安定し利益の広範な分配が実現した。分配を受けた消費者は大らかにその所得を支出し経済を活性化させた。そして、企業経営者は倫理性が高く企業ステーツマンとしての誇りを忘れずCSRを実践した。経済は安定的に成長軌道を辿り、大組織を中心に据えて秩序ある経済運営がなされてきたといえる。クリントン政権時代の労働次官となったハーバード大学教授であったロバート・ライヒは、このよ

うな状況のなかで公平性と安定性や価値観がある程度担保された状態を「民主的資本主義 (democratic capitalism)」と呼んだ。

その後のアメリカは個人が経済の主役に踊り出る。個人が市場経済システムの中で消費者として投資家として、その主権を確立するのである。しかし、必ずしも民主的資本主義にはならなかった。

1970年代後半の石油ショックを契機としてインフレ抑制のための経済政策がとられる。金利の引き下げや減税、そしてそれに規制緩和という大改革が断行される。大企業中心の寡占・独占システムが揺らぎ始める。自動車などの製造業は欧州や日本メーカの新規参入で競争が激化する。多くの業態が崩壊の危機にさらされる。規制料金で守られていた航空業界も自由化により新規参入が相次いだ。独占企業にあぐらをかいていた ATT も長距離と地域のいくつかのキャリアに分割され新規参入も相次いだ。そこに追い打ちをかけるようにグローバル化と IT イノベーションという大潮流が加わる。新しい生産方式が導入され産業の参入の壁が低くなり、90年代に始まるデジタル革命がそれに拍車をかけた。大企業崩壊で職を失ってアメリカ中に散らばっていた技術者がハイテクベンチャーの有力な人材として再デビューを果たすのである。大企業の国であったアメリカは起業家や小さな企業、そしてスモールプレヤが主役の国に衣替えした。

他方、金利や証券手数料の自由化、個人の年金や保険の株式運用の解禁などの一連の金融規制緩和が進む中で、個人の資金は信託や年金などを扱う金融機関に集約される。個人が投資の主役へと引き上げられる。

強い消費者が限りなく廉価な財・サービスを獲得し、企業は個人もしくは個人が預けた年金基金などの機関投資家により企業の行為を監視・監督されることになる。個人が消費者として投資家として企業に対して君臨する構図をつくり上げたのである。政府が介入することなく、個人に様々な選択肢が提供される。個人に自由な条件の選択を許容する経済構造が完成する。個人で起業するこ

とも可能であり、独立した個人として複数の企業と契約して仕事を行うこともできる。外部労働市場の流動性も高まった。個の自由を求めた理想郷がアメリカにおいて完成したかに見えた。

しかし、資本主義が進化したのかもしれない。競争原理が貫徹されすぎたのかもしれない。理想郷のもう一つの側面である民主主義の影は薄くなった。ロバート・ライヒは次のように慨嘆する。

富をいきわたらせ雇用と社会を安定させ経済活動の公平なルールを確立するために、公式・非公式に話し合いを担ってきた組織、つまり巨大企業、巨大労働組合、規制機関、地域の商店街や地方都市の面倒を見てきた政治家などといった組織の影が薄くなった。……企業ステーツマンがいなくなった。こうして資本主義の勝利と民主主義の衰退が一連のものとなった。政治的主権者であったはずの個人の地位をロビイストが侵食し、彼らが直接国会に圧力をかけるようになった。公正公平であるはずの政治が歪み、アメリカの民主主義が後退している<sup>30</sup>。

そして、ロバート・ライヒはこのようなアメリカ資本主義の状況をスーパーキャピタリズムと称した。

確かにアメリカは、90年代に始まったインターネット革命の波を自ら興すことで、80年代悩んでいた経常収支と財政収支の双子の赤字の解消に成功した。しかし、その後 IT ブームが去った後は、住宅不動産の証券化という金融ビジネスに著しく偏重し<sup>31</sup>、一部の倫理性の乏しい投資銀行の人たちにより巨大なリスクを世界中にばらまくことになった。不動産価格の下落によりそのリスクは顕在化し、2008年世界を大恐慌に巻き込むことに帰結する。巨大化し複雑化した現在の資本主義は、一見個人の主権を確立させたように見えるが、その構造において、人間を幸せにするものではなくなったのかもしれない。経済学の父アダム・スミスは経済の基本に倫理を据えたが、資本主義は、まさしく反省・模索・修復期にあることも事実で

ある。ICT 革命の寵児となり巨万の富を築いたビル・ゲーツ自らが巨大な寄付団体を創設し、そしてビジネスマンの価値の復権と貧しい人の救済を唱えて、創造的資本主義を構想することが必要だと主張し始めている<sup>32</sup>。彼らがリーマンショック後のスイスのダボス会議で新しい資本主義を表明したことは記憶にとどめるべき事件であった。

#### 4、アングロサクソン社会が目指すもの

アングロサクソンの世界、そしてその終着駅としてのアメリカについて多面的に述べてきた。アメリカは地域主義が息づく国であり、州により地域より全く異なる顔を見せることも説明した。私が経験したアメリカは東部と西海岸、双方とも保守ではなくリベラルと呼ばれる地域であった。この2つの地域が主としてアメリカの思想を牽引し流行を生み、時に社会現象のうねりをつくってきた。

ニューヨークという金融街、そこはエスタブリッシュメントと呼ばれる自信にあふれた人々で溢れていた。そしてサンフランシスコやシリコンバレー、ロサンジェルスを表とする西海岸はハイテクや映画産業の集積地であった。ヒッピーやニューミュージック、環境問題にも極めてセンシティブな地域である。良い意味でも悪い意味でも時代先端的・時代先駆的な人が多いところであった。そこで生活する人々は豊かな空間で明るい太陽の日差しを毎日浴びながら自由に奔放に多様に生きている。私は彼らにいつも興奮を覚えた。それは彼らの魅力ある生き方ではなかったか。それは、また彼らの堂々としたキャリア観なのかも知れない。

アメリカはどのような社会に向かおうとしているのか。その答えは西海岸で調査を重ねるロバート・ペラーをはじめとする社会学者のチームが教えてくれるのではないかと。彼らは近代という時代についてはその欠点を率直に認めている。科学万能主義を排し専門家指向のカフェテリア大学（マルチバーシティ）を痛烈に批判する。ホリス

ティックで学際的研究の必要性を訴える。資本主義については、その膨張が古き良きコミュニティに存在した天職（calling）意識を奪っていると回顧し、成功者が如何に寄付という形で公共善を実践していたとしても、個の欲望が勤労における公共善意識に勝るようなシステムには懸念を表明している。彼らは、アメリカでは近代の強い個であり続けるためにセラピストという職が機能していることも指摘している。また人生のコアにあるものは、今なお夫婦愛や家族愛そして友情であるが、一方で社会の総和としては分離・剥離・孤独化傾向にあることも否定しない。そして、そのような状況の中で個は他の人との繋がりや絆を渴望し安心や安らぎを求めるがゆえに個の依存心や依頼心が高まり、それがまたぞろ専制やファシズムの脅威につながるのではないかと、彼らは警告も発している。

彼らは複雑化し危ういこのような時代に人間としての生き方をインタビューを通じて自分たちに対し問い続けてきた。それは自分の意志でどのように善いキャリアをデザインすることができるのかということ問い続ける私たちに通じるものがある。善いキャリアデザインを個々人が求めることで最終的には善い社会を創ることができるのではないかと。彼らは私の疑問にいくばくかでも答えてくれている。長文に亘るが、高名なる著書 *habits of the heart*（『心の習慣』）の一節を紹介することでこの稿を終えたいと思う。

おそらく人生は、先頭を切ることが唯一のゴールであるような競争ではないだろう。おそらく真の幸福は、たえず前の者を追い抜くことで得られるものではないだろう。おそらく真理は、近代西洋を除く世界の大部分がつねに信じてきたこと、すなわちそれ自体において良い、そのものとして充実をもたらしてくれる生の実践が存在するということのなかにあるのだろう。おそらくそれ自体として報いのある労働の方が、ただ外的な報酬があるだけの労働よりも人間にとってふさわしいものだろう。おそらく

愛する者への永続的なコミットメントと同胞市民への市民的友情は、休む間もない競争や不安げな自己防衛よりも好ましいものだろう。おそらく存在そのものの神秘に触れて発する感謝と驚きの表現としての共同の信仰は、何よりも重要なものだろう。もしそうであるなら、私たちは私たちの人生を変えなければならない。そして私たちが好んで忘れてきたものを思い出さなければならない。

私たちは自らを創造したわけではない。私たちが今こうしてあるのは、私たちを形成した共同体があるからである。またそうした共同体を存立せしめているところのもの、「歴史における恩寵の構造」があるからである。このことを私たちは思い出す必要がある。私たちはこの地球上での私たちの生命の物語を、打ち続く成功の連なりとしてではなく、喜びと苦難の歴史として見る必要がある。私たちは、今日の世界において苦しんでいる何百万という人々のことを、そして過去における彼らの苦しみが今日の私たちの豊かさを可能にした何百万という人々のことを、思い出す必要がある。

何にもまして、私たちは自らの貧しさを思い出す必要がある。私たちは豊かな国民と呼ばれてきた。一人あたりの GNP は他のいくつかの国によって追い抜かれたとはいえ、まだまだ私たちは非常に豊かである。それでも私たちの真の姿は、貧困である。私たちは結局のところ、この地球上において無防備である。物質的な所有は、私たちに幸福をもたらさなかった。私たちの軍隊は、核による破壊を防ぐことはできない。いかに生産性を上げたところで、新しい武装システムを造ったところで、私たちの真の姿を変えることはできない。

私たちは、自分たちが他の人間から区別された特別な創造物だと思ってきた。20 世紀後半の現在、私たちは、自らの貧困はもっとも貧しい国々の貧困と同じくらい絶対的なものだということを理解している。私たちは力からまた力へと追い求めてゆくなかで、人間の真の姿を否

定してきた。私たちは人類にふたたび加わり、自らの本質的な貧しさを贈り物として捉え、私たちの物質的富を貧しい人々と分かち合った方が良いのだ。

こうしたヴィジョンは、現在のアメリカの政治的言説のスペクトラムから見ると、保守でもリベラルでもない。それは、「伝統的な」社会の調和の世界へと引き返そうとするのではない。そうした社会の知恵から学ぶ用意は十分あるとしても、それはいつさいの伝統に対する近代的な批判を拒絶しようというのではない。しかし、いまやそれは批判の批判を展開し、人生は、信じることと疑うこととのバランスをとりつつ歩んでゆくものだと主張する。こうしたヴィジョンは、知識人の理論だけからもたらされるのではなく、アメリカ人がすでに営んでいる生の実践からもたらされるものである。こうしたヴィジョンは、社会的な懸念を究極の懸念へと結びつけ、そのどちらをも軽んずることがないようなあり方を求める。とりわけこうしたヴィジョンは、私たちの友人、私たちの同胞市民たちの討論と実験によって確認され、訂正されることを望んでいる<sup>33</sup>。

#### 注

- 1 アングロサクソンの影響はアメリカのみならずアイルランド、カナダ（ケベック州を除く）、オーストラリア、ニュージーランド、シンガポール、香港などかつて英国の植民地で英連邦に加盟した国々におよぶ。英連邦に加盟する国々では公用語としての英語、そして英国法に由来するコモンローの法体系を導入した。IT 革命後に国の競争力が飛躍的に強まった国にアングロサクソン諸国が多く含まれが、それは時代に柔軟なコモンローが影響したといわれている。
- 2 Hugh Gunz, Maurey Peipel "Handbook of Career Studies" Sage Publications, 2008
- 3 Hugh Gunz, Maurey Peipel p4

- 4 Hugh Gunz, Maurey Peipel, p4
  - 5 エドガー・シャイン、『キャリアダイナミックス』白桃書房、1991、p xiv
  - 6 Hugh Gunz, Maurey Peipel p 327
  - 7 連邦制とは強力な諸構成体と強力な中央政府で構成され、その各々が市民によって委任され、市民を直接の対象として行使される権限を付与された権力をもつ政体 (D.J. ユレーサ) である。アメリカは連邦制の先鞭をつけた国だ。しかし、そのアメリカでも 1913 年までは上院議員が (形式的には) 直接に選挙されたのではなく、州の立法府で選ばれていたという事実がある。(ウィルフリッド・スウェンデン、『西ヨーロッパにおける連邦主義と地域主義』公人社、2010、p13)
  - 8 『七つの資本主義』(ハムデンターナ、トロンペナルス 1993 年、p5 ~) を参考にしている。その他の論点としては逐次的時間観 vs 同期的時間観、獲得地位 vs 生得地位、タテ社会 vs ヨコ社会が指摘されている。
  - 9 エマニュエル・トッド、『新ヨーロッパ大全 (*l'invention de Europe*)』藤原書店を参考にしている。
  - 10 田中英夫、『英米法総論』東京大学出版会、1980、p 5
  - 11 田中 p 14
  - 12 田中 p 16
  - 13 田中 p 21
  - 14 田中 p 21
  - 15 ジェレミー・リフキン、『ヨーロッパンドリーム』NHK 出版、2006、p 182~p 193 を参考にしている。
  - 16 リフキン p198
  - 17 第一の道は大きな政府によりすべての人にある程度の平等な生活を保障することを理想として、そのためには政府が一定の役割を果たすべきと考えるもので、社会民主主義と同義的に使われる。第二の道は新自由主義とも呼ばれるもので、小さい政府で減税など市場を活用して経済効率を図ろうとするものである。第三の道は市場の効率と社会正義や平等との両立を図らんとするもので、労働党のブレイン、ギデنزにより提唱されたものである。『ブレア時代のイギリス』(山口、岩波) を参考にしている。
  - 18 1980 年代のサッチャー (Margaret Thatcher) のニューライト改革によって出現した。「排除的社会」(exclusive society) の性格をおびる。
  - 19 1990 年代後半、ブレア (Tony Blair) 政権は「包含的社会」(inclusive society)、「社会民主主義の刷新」を唱えた。
  - 20 アメリカもイギリスと同様の政治路線を歩んだといわれる。1982 年共和党のロナルド・レーガン大統領が登場する。減税と小さな政府を旗印にした彼の政治路線は新自由主義と呼ばれた。また、1992 年の政権交代により誕生した若き大統領クリントンは、民主党の貧困層や弱者・中小企業の救済に重心を置くものの、経済第一主義で積極的な政策をとったことから、彼の政治路線も第三の道と呼ばれている。彼は ICT 革命を誘導し未曾有の経済成長を達成し同時に緊縮財政も断行したことから、積年の課題であった財政赤字と経常収支赤字という双子の赤字を見事に解消させた。
  - 21 ペータ・ロコスキー、『資本主義の倫理』新生社、p17
  - 22 レブケ、『ヒューマニズムの経済学』勁草書房、1982、p13
  - 23 レブケ p14
  - 24 ペータ・コスロフスキーは資本主義に対する懸念についてつぎのようにまとめている。
- ①私的所有の際限なき蓄積は、制御された一定の市場状態から質的な飛躍をして権力の問題に発展してしまう。
  - ②無制約な利潤や効用の最大化は、人間を貪欲で欲張りな者にし、人間的行為の目的の豊かさを失うように導いてしまう。
  - ③もっぱら市場の成果でもって、生産と社会的地位の割り振りの調整を行うことは、生産コントロールとライフチャンス (ライフバランス) の割り振り方についての誇張された主観

主義に導くと同時に、実質的な生活の諸目的を無視することに至りつく。しかし同時に、自由と効率が経済の中で確保されるべきだとすれば、この形態を放棄することもできない。従って、倫理による補完が必要であるとしている。（『資本主義の倫理』ペータ・コスロフスキーはP91,92を要約・修正・加筆した）。

- 25 レプケ p19
- 26 Michelman (1983)
- 27 社会主義を死守した中国も社会主義独裁政権ながら同時期経済の市場化を加速する。
- 28 このほかブルノ・アマーブル。『五つの資本主義』。The Diversity of Modern Capitalism 2003, p201 203、市場ベース型（新自由主義型）モデル（アングロ諸国；価格競争、フレキシブルな雇用、洗練された金融市場、競争的高等教育システム）、社会民主主義型モデル（デンマーク、スウェーデン、フィンランド；高度の社会保障と適度な雇用保障、職業訓練の重要性）、大陸欧州型モデル（スイス、蘭、アイルランド、ベルギ、ノルウェー、独、仏、オーストリア；高度な雇用保障、未完成の社会保障、発達した職業訓練）、「地中海」モデル（ギリシャ、伊、ポルトガル、スペイン；より高度な雇用保障、劣る社会保障、脆弱な職業訓練）、アジア型モデル（日本、韓国、；国家主導、集権的金融システム、協調的大企業の経営戦略、企業ベースの訓練）の五つに分類している。
- 29 W. J. Baumol, R. J. Litan, C. J. Schramm (“Good Capitalism, Bad Capitalism and economics of growth and prosperity” Yale University Press, 2007, p60) は、完璧な色分けは難しい（ほとんどが混合形態）が、概ね次のような国が代表例であるとして、国家主導資本主義 (state-guided；国家が市場をガイドしようとし、特定の産業が主導する；中国、インド、ロシア)、機能的資本主義 (organic；パワーと富の源泉が少数のグループに掌握されている；ラテンアメリカ)、大企業資本主義 (big-firm；伝統的大企業が重要な経済活動を行う；欧州大陸諸国、日本、韓国)、起業的資本主義 (entrepreneurial；小規模の革新企業が重要な役割を担う；アイルランド、イスラエル、台湾) の四つのタイプに分類し、起業的資本主義のタイプの国が経済成長・経済再生に成功していると指摘した。
- 30 Robert Reich "Super Capitalism" Knopf 2007  
ロバートライヒ『暴走する資本主義』東洋経済 2008
- 31 金融のグローバル競争のなかで、アメリカは1929年の大恐慌の遺産として築き上げた銀証分離という原則(1933年銀行法グラススティーガル法)を放棄する。金融機関自らがリスクを取りうるドイツ・スイス型のユニバーサルバンキングの陥穽にはまるのである。ウォールストリートのデリバティブを駆使した証券化の本来の目的はリスク分散にあったが、投資銀行のための収益の手段と化し、結果的にアメリカがリスクをつくり、そのリスクを世界にばらまくことになった。
- 32 Michael Kinsley、Creative Capitalism Simon & Schuster、2008
- 33 Robert Bellah e al “Habits of the Heart” University of Berkley Press 1985 P295,296  
ロバート・ベラー他、『心の習慣』みすず書房、1991、p 354を参考に改訳



---

## The "Career design era" has started in Japan(4)

### - On Anglo Saxon Society where career studies started and its future

KOKADO Hiroyuki

---

This paper, the fourth in career design series, is subtitled, "On Anglo Saxon Society where career studies started, and its future". It covers a brief history of the United States, the characteristics of its society such as universalism and individualism, how its economic and political systems are different from

Japan, and its attitude towards investment risk. Secondly I classified capitalism in several types and try to examine whether the US can still be a good model of capitalism. Finally I introduce one perspective on the future of the US.